

近い人との心理的距離と防災意識の関係について

Relationship between disaster preparedness awareness and psychological distance from people close to you

北海道大学大学院工学院 ○学生員 西川 怜 (Rei Nishikawa)
北海道大学大学院工学研究院 正員 田中 岳 (Gaku Tanaka)

1. はじめに

近年、地震や大雨などによる自然災害の著しい激甚化は、避難行動を要求するような発災が免れない事態を引き起こしている。そのなかで注視すべき課題の一つが災害時に避難に関する情報を認知していながらも適切な避難行動を取らない事例の存在である（参考文献 1：3. 避難行動の状況について、問 13「避難しなかった理由はなんですか」）。「被害にあうとは思わなかったから」「これまでに被害にあったことがなかったから」「いざというときは2階などの上階へ逃げればよいと思った」といった回答¹⁾が示すように、実際には避難に関する情報が発令された地域の全てが同等の被災リスクをもたないことにくわえて、住民の災害への知識や心理状態が意思決定と行動に影響を与えているようである。特に後者については、認知心理学の分野では正常化の偏見（正常性バイアス）として知られている。ただし菊池²⁾は、既往研究から災害時の認知バイアスを概観するなかで、「避難しなかった」理由を正常化の偏見で評価する報告も、またそれに異を唱える報告もあることを述べている。

他方、避難に関する情報を認知し、適切な避難行動をとるといった行動へと、住民の行動変容が期待される報告事例がある。宮村、田中³⁾によるアンケート調査では、共助の意識を示す声かけの機会を与える身近な人の存在は、正常化の偏見を抑制し、防災意識の向上へとつながる可能性を持つと示唆している。また、安本、牛山⁴⁾は、平成 28 年台風 10 号における避難行動調査で、他者からの呼びかけが避難行動を促したことを報告している。また、平成 30 年 7 月豪雨災害に関する広島県民の避難行動調査⁵⁾では、他者の呼びかけが避難行動を強く促進したと報告されている。これらのように、他者の存在とその間にある関係性が防災意識や行動に影響を与えるものと考えられる。

本研究では、防災意識と防災準備行動の現状把握、これに加えて、身近な人（近い人）の存在がそれら防災意識や防災準備行動に与える影響について情報収集することを目的に、アンケート調査を実施する。

2. アンケート調査

朝位、古賀⁶⁾は、防災行動を、「知識」「関心」「動機」「行動意図」「行動」で関連付けた心理プロセスモデルで表現している。その原型モデルは、三坂、小池⁷⁾の研究にある。本アンケート調査では、これらを参考として、回答者属性（年齢等）にくわえ、被災経験とその内容、自然災害と住居の安全性に対するリスク認知、避難訓練や災害伝承等の防災に関する興味・関心とその経

表 1 アンケート調査概要

調査対象	H 大学 K 寮の学部学生
配布日（期間）	2020 年 12 月 28 日（翌月末回収）
配布方法	在寮生の LINE グループから調査票（Google フォーム）を送付
回答者数（率）	55 名（14.9%）
回答者属性	平均年齢:20.85 歳 在寮期間:1 年目（13 名） 2~4 年目（41 名） 5 年目以上（1 名）

験、日頃の災害準備状況とその十分さ、避難勧告等の発令や周囲の人の避難行動を認知、また呼びかけがあった後の対応（避難行動をとるか）等を設問に設ける。なお、本研究では、例えば、三坂、小池⁷⁾などの既往研究で述べられてきた防災意識の表れとしての行動意図や行動等と、近い人の存在との関係を分析することを主目的として、実在の最も近い人を回答者が想定したなかで、その近い人との心理的距離を測定する。

本アンケート調査は、H 大学 K 寮の在寮学部学生 378 名（調査当時）に回答の協力を依頼した。調査票は Google フォームで作成し、在寮生が全員加入している LINE グループを用いて 2020 年 12 月 28 日に配布し、翌年 1 月末に回収した。調査概要、回収率、および回答者の属性等は、表 1 のとおりである。なお、寮という共同生活の環境が、近い人との心理的距離の取り方に影響を与えることも考えられる。そこで、本アンケート調査では、調査時を基準に、入寮前後それぞれで（同一人物であるかは問わない）実在した最も近い人との心理的距離を測定し、その値を入寮前後それぞれでの「最も近い人の存在とその近しさ」と定義することとした。

3. 調査結果（防災意識とその準備行動の現況）

ここでは、被災経験、リスク認知、避難訓練等の防災に関する興味・関心と経験、災害準備行動とその状況の十分さの設問等、それぞれの設問の回答から、回答者の防災意識とその準備行動について、その現況を把握する。

被災経験のある回答者は、全回答者の 54.5%にあたる 30 名であった。図 1 に示すように、その内容（複数回答可）としては、停電や断水 16 名、家具などの転倒 15 名などで、帰宅困難の経験者（11 名）もいる。また、わずかなではあるが、避難所や仮設住宅での生活経験など、日常に戻るまでに長期間を要した経験者もいる。

自然災害に感じる不安（リスク認知）については（図

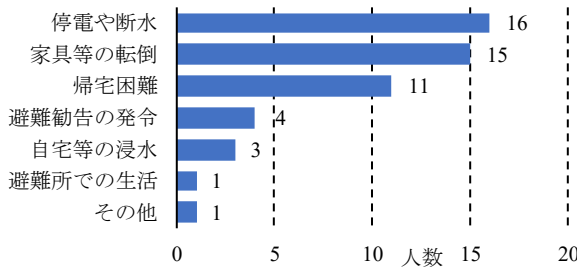


図1 被災経験の内容 (複数選択可)

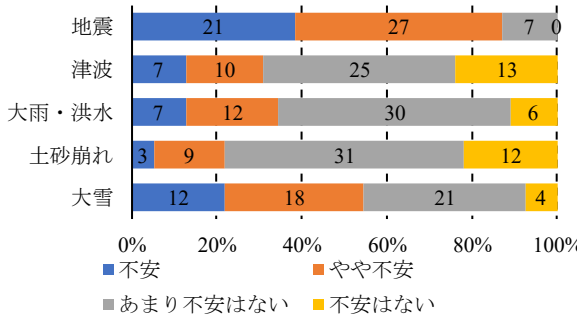


図2 自然災害に感じる不安

表2 住居(建物)に感じる不安(回答数)

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
7	13	24	11

2)、「不安」または「やや不安」を選択した回答者をまとめると、地震48名、次いで大雪30名となった。その一方で、大雨・洪水への不安は小さい傾向にある。また、住居の安全性(建物への不安)については(表2)、全回答者の63.6%にあたる35名が、「あまりそう思わない」もしくは「そう思わない」と回答している。

入寮前後の状況について回答を求めた避難訓練や防災学習の参加と情報収集の経験、経験はないものそれらに対する興味・関心の有無を図3にまとめる。まず入寮前であるが、小中学校、高等学校等での避難訓練等の実施を反映し、ほぼ全回答者が学校での避難訓練に参加していた(51名)。しかしその一方で、地域の避難訓練への参加経験者はわずかである(15名)。ただし、全回答者のおよそ半数(25名)は、能動的に情報収集を行っており、災害や防災は自身の関心事としての位置づけがなされていると考えられる。一方、入寮後では学校の避難訓練の参加経験者は17名と大幅に減少し、加えて、他の4つの項目でも「興味・関心や必要性を感じていない」回答割合が増える結果となった。

次に、同じく入寮前後について回答を求めた災害準備行動の状況等(9項目)について、入寮前後の回答結果を図4(左:入寮前;右:入寮後)にまとめる。入寮前では、「避難経路の確認」や「懐中電灯等の用意」の項目で、30名以上が実施していたと回答した。「家族等での安否確認の方法の決定」、「非常食の備蓄」や「家電等の固

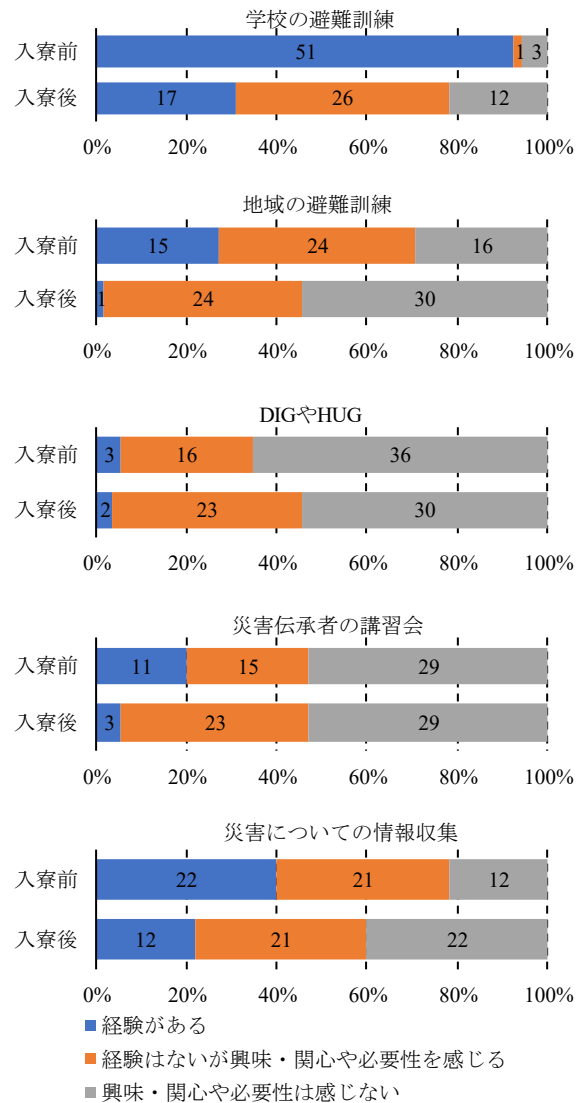


図3 防災活動への参加経験と興味・関心

定」の項目では、その実施率は高くはないものの、実施の意識はあることが回答結果から読み取れる。また、入寮前後でみると、「モバイルバッテリー等の用意」以外の8項目で実施率が低下している。

4. 近しい人との心理的距離と防災活動・災害準備行動との関係についての考察

4.1 心理的距離

自身(人)と相手(人)の間には、二つの距離が存在する。一つが、物理的な空間のなかで認知される距離、もう一方が、自身の内で感じる距離である。それぞれは、対人間距離、心理的距離とよばれている。経験上、コミュニケーションをとる場面で他者との間で取る距離感が後者にあたる。これまで、社会、教育、臨床等と心理学の研究領域が重なり合うようなところで、この心理的距離を対象とした多様な成果が出されている。なお、この心理学的距離に関する既往研究の動向を整理した藤井⁸⁾は、研究対象の違いなどからくる研究者ごとの心理学的距離の定義・概念の相違によって、その定義・概念の統一化がなされていないのではと指摘している。然しながら、

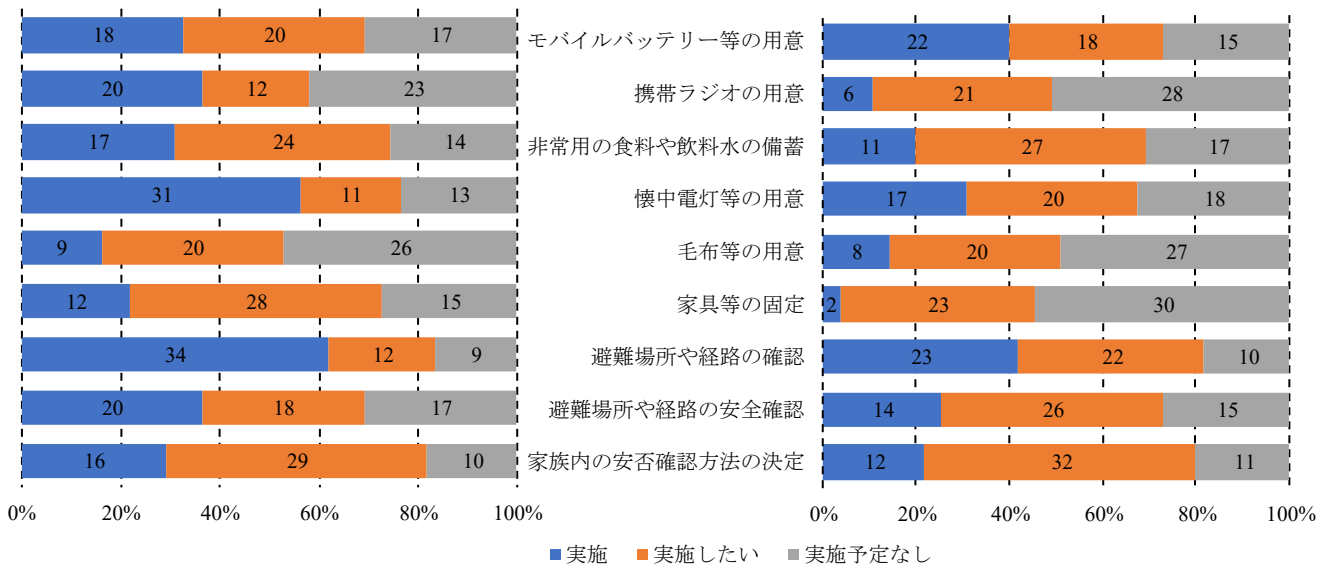


図4 災害準備の状況 (左:入寮前, 右:入寮後)

この距離を測ることに對しては、幾つかの既往研究が参考になるであろう。その距離を測る上で注視すべきが、自身と相手との物理的距離とは異なり、心理的距離には、自身が相手との間で取る距離と、自身に対して相手が取っている（取っていると感じる）距離といった、二つの方向の距離が存在することである。山根⁹⁾は、前者を「能動的」、後者を「受動的」と称し、さらにその各々には行動として表れる「表出」と、実感として感じる「表象」とがあり、これらを合わせて「心理的距離の二重の二重性」と述べている。山口、吉澤ら¹⁰⁾は、生徒と教師との間の心理的距離と親密さを検討するなかで、評点段階1を親密、評点段階10を疎遠とした10段階で、父親(母親)を基準(評点段階1)として生徒が感じる教師の評点段階から心理的距離を定めている。なお、この距離について山口、吉澤ら¹⁰⁾は、山根⁹⁾が述べる心理的距離の四側面を統合したものと述べている。

本研究では、この心理的距離を、「自身からみた対象者との親密さ」と定義し、「自身」と「自身と全く関わりの無い他人」との間で該当の近い人が位置する場所を測定することとした。その際、調査票には1刻みの数直線を用意し、その左端0を「自身」、右端10を「自身と全く関わりの無い他人」とした。図5は、入寮前後での近い人との心理的距離の測定値から、調査時を基準とした入寮前後それぞれでの「最も近い人の存在とその近しさ」を表したものである。入寮前の平均値3.18、中央値3、最頻値3、入寮後の平均値3.58、中央値3、最頻値2が得られた。また入寮前では、全回答者の7割近い37名が1から3の値を選択しており、その近さが読み取れる。

4.2 防災活動への参加経験と興味・関心との関係

「最も近い人の存在とその近しさ」(近い人との心理的距離)と、防災活動への参加経験と興味・関心に関する5つの設問の回答結果との対応(相関係数)を表3にまとめる。なお、各項目に共通し、(a)「経験があった/経験がある」、(b)「経験はないが興味・関心や必要

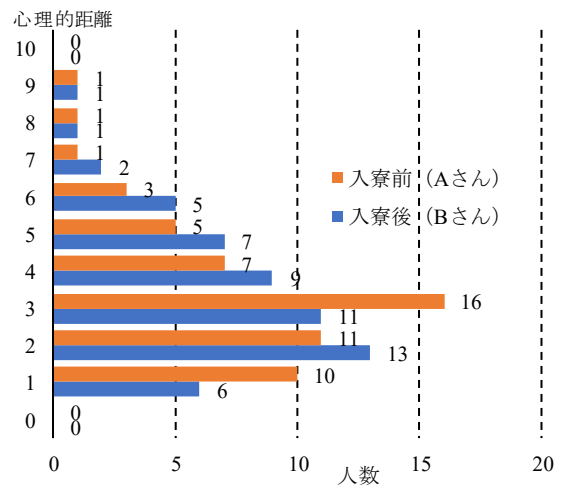


図5 入寮前後での近い人との心理的距離

性を感じていた/経験はないが興味・関心や必要性を感じている」、(c)「興味・関心や必要性を感じていなかった/興味・関心や必要性を感じていない」の3つの選択肢に対して、それぞれ得点(a:2点;b:1点;c:0点)を付与し、それらの合計点(10点満点)も算出した。なお、近い人との心理的距離は値が小さいほど距離が近いことを表すが、ここではそれらを逆転させている(相関係数が1に近いほど「心理的距離の近さと興味・関心には正の相関がある」)。表3に示されているように、「学校の避難訓練」については入寮前0.251、入寮後0.214と弱い正の相関が見られたが、他の4項目に関しては、相関は見られないようである。

4.3 災害準備行動との関係

「最も近い人の存在とその近しさ」(近い人との心理的距離)と、災害準備行動に関する9つの設問の回答結果との対応(相関係数)を表4にまとめる。なお、4.2と同様、入寮前/入寮後のそれぞれについて、(a)「実施していた/実施している」、(b)「実施していないがいつか実施したいと考えていた/実施していないがいつか

実施したいと考えている」、(c)「実施する予定はなかった／実施する予定はない」の3つの選択肢に対し、それぞれ得点 (a:2点;b:1点;c:0点) を付与し、その合計点 (18点満点) も算出した。また、ここでも心理的距離が近いほどその値が大きくなるように変換している。表4に示されているように、入寮前の「毛布等の用意」が0.368と弱い正の相関が見られたが、他の項目に関しては、入寮前後ともに相関は見られないようである。しかし一方で、9項目の合計点の相関係数は入寮前 0.228、入寮後 0.255と、弱い正の相関が見られた。このことは、「最も近い人の存在とその近しさ」が災害の準備行動と関係する可能性を示唆するものであり、注視すべき結果といえる。

5. まとめ

本研究では、近い人の存在が防災意識や防災準備行動に与える影響について情報収集することを目的に、アンケート調査を実施した。

本アンケート調査から、以下のことが認められた。

- 入寮前後において、防災活動への参加経験と興味・関心、災害に備えた取り組み、何れに対しても防災意識の低下が認められた。この変化は、防災を体現する、あるいはこれを考える避難訓練等の機会の減少にもよる。受動的な参加であったとしても防災活動の機会が防災意識の醸成に必要な不可欠ともいえる。
- 「最も近い人の存在とその近しさ」(近い人との心理的距離)と、防災活動への参加経験と興味・関心との間には明確な関係は見られなかった。一方で、災害準備行動との間には弱い正の相関が見られた。このことは、近い人の存在が準備行動に影響を与える可能性があることを示唆している。

今後、さらなる調査を行い、近い人の存在が防災意識や防災準備行動に与える影響について検討する予定である。

謝辞：本調査にご協力いただいたH大学K寮の皆様、その他関係各位の皆様に対して、この場を借りて感謝の意を表します。

参考文献

- 国土交通省北陸地方整備局千曲川・犀川大規模氾濫に関する減災対策協議会情報提供検討部会：令和元年台風第19号における避難行動と情報に関するアンケート調査（堤防決壊による被災世帯）アンケート集計結果，<https://www.hrr.mlit.go.jp/chikuma/bousai/gensai/siryuu/6/4-1.pdf>(参照 2022-05-03)。
- 菊池聡：災害における認知バイアスをどうとらえるか—認知心理学の知見を防災減災に応用する—，日本地すべり学会誌，Vol. 55, No. 6, pp. 286-292, 2018。
- 宮村歩，田中岳：北海道日高町における防災意識変遷分析と正常化の偏見抑制要因の検討，土木学会論文集 B1（水工学），Vol. 72, No. 4, pp. I_1303-I_1308, 2016。
- 安本真也，牛山素行，関谷直也：平成28年台風災害

表3 防災活動への参加経験等と心理的距離の相関係数

	入寮前	入寮後
学校の避難訓練	0.251	0.214
地域の避難訓練	0.131	0.002
DIG や HUG	0.051	0.063
災害伝承者の講習会	-0.093	-0.164
災害についての情報収集	0.076	0.002
興味・関心 合計	0.106	0.044

表4 災害準備行動と心理的距離の相関係数

	入寮前	入寮後
モバイルバッテリー等の用意	0.229	0.204
携帯ラジオの用意	0.199	0.189
非常食や飲料水の備蓄	0.155	0.172
懐中電灯等の用意	0.100	0.090
毛布等の用意	0.368	0.094
家具の固定	0.078	0.097
避難場所や経路の確認	0.126	0.283
避難場所や経路の安全確認	0.191	0.153
安否確認方法の決定	-0.028	0.219
災害準備 合計	0.228	0.255

における岩泉町での避難行動の分析，自然災害科学，37 特別号，pp. 33-45, 2018。

- 広島県みんなで減災推進課：平成30年7月豪雨災害に関する県民の避難行動の調査について(総括)，<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachm ent/407429.pdf>(参照 2022-05-03)。
- 朝位孝二，古賀将太，榊原弘之：洪水経験のある住民へのハザードマップ配布前後の防災意識構造の比較，土木学会論文集 B1（水工学），Vol. 67, No. 2, pp. 30-40, 2011。
- 三坂和弘，小池俊雄：水害対策行動と環境行動に至る心理プロセスと地域差の要因，土木学会論文集 B, Vol. 62, No. 1, pp. 16-26, 2006。
- 藤井恭子：青年期の友人関係における心理的距離に関する研究動向と発達の意義，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第7号，pp. 279-288, 2004。
- 山根一郎：心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析，心理学研究，Vol. 57, No. 6, pp. 329-334, 1987。
- 山口正二，吉澤健二，原野広太郎：生徒と教師の心理的距離に関する研究，カウンセリング研究，Vol. 22, No. 1, pp. 26-34, 1989。